

一九世紀前半における「銀行家」の社会的地位と文学空間（一）

柏 木 治

はじめに

小説が文学の中心に位置づけられるようになった一九世紀は、産業と銀行の時代でもあった。フランスの場合、政治情勢が比較的安定するようになった王政復古時代、イギリスにひと足遅れて産業化の波が訪れるのだが、産業の急速な発達によって生まれたのは、進歩に対する感嘆や樂觀主義よりはむしろ、不安と落胆の交錯する複雑な感情であった。もちろん産業化は社会のあらゆる層で物質的欲求を満足させる可能性をひらいたが、当時のフランスにおいてその最先端にいた実業家や技術者の頭から離れなかったのは、自国の繁栄以上にイギリスの覇権、逆にいえばフランスおよび大陸の国々の後れであった。革命以来、四半世紀におよぶ動乱のあと、比較的平和であった王政復古期の一五年間をへても、その凋落ぶりは覆いようもなく、一八三〇年ごろにはイギリスとの差はだれの目にも明白なものとなる。一例を挙げれば、綿紡績はイギリス人に牛耳られていたといつてよく、一七八〇年に三千トンだった消費量が一八〇〇年には二万五千トン、一八二〇年には七万トン、一八三五年には一四万トンに達し、フランスの四倍にもなっていた。¹⁾当然、工場設備もそれに相応するように差が開く。他の領域でも概ね同様の姿を呈していた。

こうしたフランスの産業体制の後れにはいくつかの原因が考えられるが、最大のものは公共事業や新規開拓企業を背後から支える金融体制が整っていなかったことであろう。一九世紀前半、フランスの銀行の状況はといえば、世紀のはじまりとともにナポレオンのもと、フランス銀行 (Banque de France) が発券銀行として創設されたが、そもそもフランス銀行券自体の流通はきわめて限定的で、パリ周辺にとどまっていた。地方はというと、小規模な個人銀行がその業務を行っていたにすぎない。フランス国内には相当の貯蓄があつたにもかかわらず、それを産業興進のために供給できるしくみにはなっていなかったのである。それらは受け入れた預金をもとに短期貸付をする金融機関であり、長期にわたって大きな資金を供給することは基本的になかった。資金供給するいくつかのオート・バンクはあつたものの (その代表がロスチャイルド銀行である)、不動産等の担保をとることが前提となつていたから、公共事業はもとより、新規に起業するための資金確保の目処が立たず、結果として産業振興にはつながりにくかつたのである。

銀行体制の確立において世紀前半は過渡期であり、それゆえにいまだ統制のない混沌の状況のなかで産業者と銀行家の結びつきには恣意的なところも多く、疑惑の目が向けられるような事件にも事欠かなかつた。逆にいえば、銀行家はかなり自由な裁量をもち、広く活動できる場を与えられていたと考えることもできる。

ところで、小説が花開いたのは、まさにこのような経済状況の時期である。文学のなかに伝統的な主題とはやや異なる姿で「金」があらわれ、また新しいテーマとして「銀行」や「銀行家」が登場するのは、こうした時代状況と無関係ではない。フランスで古典主義経済学がたちをなすのも同じ時代であつて、ここにいたつて文学の「金銭」と経済学の「貨幣」がより親密な関係をもつようになったといつてよい。この事態をもつとも鋭敏に嗅ぎ取り、最初に物語空間のなかに取り込んだのがバルザックのようなリアリズムを標榜する小説家たちであつた。

本稿では、「銀行家」という文学的テーマがどのように状況のもとに形成されていったのかを検討するにあたり、その準備作業として銀行家の社会的地位を歴史的に確認し、物語空間のなかにどのように取り込まれているかを吟味する。紙数の関係から、具体的な実在の銀行家と文学的表象とのかわりについては、次稿に譲る。

「成り上がり」の世紀

一九世紀は「成り上がり」の時代であった。堅固な階層意識に裏打ちされていた身分社会が前期末の革命によって崩壊し（もちろん身分的階層は消えたわけではないが、革命は少なくとも身分や階級というものが「打破」されるものであることを人びとの意識に植えつけた）、下層階級出身者が社会に君臨する、あるいは地方から中央に勇躍し権力を掌握することが生じうる時代へと移行するのが一九世紀前半である。ある者たちはコルシカ島出身の皇帝にそれを見、そのようなヴィジョンは地方の下層階級を出自とする『赤と黒』の主人公、ジュリアン・ソレルにも凝縮されている。

もっとも、「成り上がり」の観念は古く、語史的にみれば、*«parvenu»*（成り上がった）という形容詞の登場は一七七八年であり、類似表現の *«nouveau riche»*（成金）もほぼ同じ時期（一七二一年）にあらわれている。ここで確認できるのは、一七世紀にモリエールらによって辛辣に滑稽化された「成り上がり」風情が、一八世紀初頭にはすでに特定のイメージとして観念化され、人びとに共有されていたということである。さらに、マリヴォー（Pierre Carlet de Chamblain de Marivaux 一六八八～一七六三）の代表作のひとつに『成り上がり百姓』（*Le Paysan parvenu* 一七三四～三五）があることからして、下層階級に出自をもちながら社会的栄達をはたすという現象はすでに一八世紀によく目にする事象だったのではないかとの推測も成り立つかにみえる。しかしながら、現実的にはそう

ではない。実際の社会現象として一般化するにはまだ時間が必要であつて、マリィエレーヌ・ユエが示していたように、たしかに首都パリへ上る若者の数は増えているものの、だからといって「成り上がり」を多く生み出したわけではない。⁽²⁾ 植田祐次もユエの研究を踏まえて、「一七世紀末から緩慢化する立身出世という名の成り上がり現象は、一八世紀を通じて変わらなかった」としたうえで、「この世紀の小説に描かれる成り上がりは、実は民衆のうちに潜む上昇願望を作者が創造の世界に託したと考えなければならない」と結論づけている。⁽³⁾

要するに、一八世紀はまだ、現実に「成り上がり」を実現できるような社会状況にはなく、実現したとしてもごく例外的な事例にとどまっていたということである。むしろその例外性ゆえにこそ、文学のなかにおける「成り上がり」は一層際立ってみえるのであつて、それは、支配階層の恩恵に与れない多くの人びとの心のうちに希望的可能態としてイメージされた形象であり、同時に上層階級からは蔑まれ滑稽化される人物造形のひとつでもあつた。「成り上がり」が社会的に認知されるのは一九世紀を待たなければならない。

さて、「成り上がり」を構成する最大の要素は、いうまでもなく「金」である。「parvenu」という語は時とともに *nouveau riche* という表現に置き換えられていくが、この *«riche»* という語からも「金」とのかかわりはいっそうくつきりと透けてみえるだろう。これらの言葉は一九世紀に入って急速に社会性を帯び、従来とはちがう階級意識のなかで使用されるようになる。すなわち、資本主義経済の進展のなかで、富は貨幣単位によって数値にあらわされ、土地や建物などの実物資産もその価格によつて客観的に見積もられるようになったことから、「貴族」や「平民」という身分上の階級ではなく、「金持ち」と「貧乏」というかたちの経済的格差、あるいは対立として可視的になつたのである。金はそれ自体では軍事力のような顕在的な力にはならない。しかし、すべてをを買うことができるという「購買力」が他のあらゆる力以上に威力を発揮する時代が到来したのだ。アダム・スミスはつぎのようにいう。

ホップス氏がいつているように、「富は力である」。だが、巨大な財産を獲得したり相続したりする人が、かならずしも市民または軍人としての政治的権力を獲得したり相続したりするとはかぎらない。おそらくかれの財産はこの両者を獲得する手段をかれに与えるだろうが、しかし、その財産をただ所有しているだけでは、このどちらをもちかにもたらずとはかぎらない。

この所有がただちに、しかも直接にかれにもたらず力は、購買力である。すなわち、そのときその市場にあるすべての労働、またはすべての労働の生産物にたいする一定の支配力である。かれの財産の大きさは、この力の大きさに正確に比例する。

すなわちその財産でかれが購買または支配しうる他の人々の労働の量、または同じことであるが、他の人々の労働生産物の量、に正確に比例する。あらゆる物の交換価値はその所有者にもたらされるこうした力の大きさにつねに正確に等しいにちがいない。⁽⁵⁾

モノであれ労働力であれ、何でも「買える」力こそが金のもつ価値なのであり、あらゆるものが貨幣単位によつて整然と秩序化される価値世界においては、金こそが支配力の源となる。「豊かさ」が「金持ち」と等式で結ばれ、さらに「金をもつこと」が「力」であるような時代になったのである。「金」がこのような力をもつのは、資本主義的市場原理の成立が前提になっている。

じつはヨーロッパにおいて、あらゆる生産が市場での販売を目的になされ、どのような所得もそのような販売に起因しているようなメカニズム、すなわち統制的な市場から自己調節的市場へと移行するのは、一八世紀末になってからである。重商主義はたしかに国家の政策として商業化を強力に推し進めはしたが、今日いうところの「市場経済と

は正反対の方向で市場を考えていた⁽⁶⁾。つまり、国家による産業への干渉は広範囲に許容されていたのであり、また、「労働と土地の商品化という考え方——市場経済の前提条件——にはひとしく反対した」のである⁽⁷⁾。カール・ポランニーは、「英仏いずれにおいても、一八世紀の最後の十年に入るまでは、自由労働市場の設立が議論されたことさえなかった」と断じたうえで、「一八世紀末における統制的市場から自己調節的市場への移行は、社会構造の完全な転換をあらわすものであった」と述べている⁽⁸⁾。

経済が政治的領域から切り離されて万能の力をもちはじめると、そこでは古くからあった清貧の思想——たとえばそれはジャック・ル・ゴフが描きだした、「金銭に対する闘いだけでなく、金銭の拒絶を含」む托鉢修道会の基本的行動方針や、ジョルジュ・アガンベンが中世社会にみた、モノの使用と所有が互いに無関係であるような「生」の形式のうちに精神的豊かさをもとめようとする価値観⁽⁹⁾の系譜にあるもの——は、ごく限られた例外的な場へと拉致され、逆に、資本や財貨といった経済的価値が中心的な地位を占めるようになるのはあきらかであろう。もはや「いと高き貧しき」(Altitima poverta) に共鳴する感性は風前の灯に等しい。これに代わるように「金持ちになれ」(Enrichissez-vous) という標語が声高に叫ばれるようになって、金を語ることへの羞恥も自制もにわかに薄れ、経済的優位性がそのまま政治的支配を意味するようになる。やがて、社会制度以上に経済体制が優先されるにおよんで、一九世紀半ば以降、富は時に労働搾取の結果とみなされ、不平等と不公平の力学によるものであるとの認識が広がり、大規模資本家への富の集中がしだいに批判の対象となっていく。たとえば、伝統的な職人組合の再編成を試み、ジョルジュ・サンドらとも長く親交のあったアグリコル・ペルディギエ (Agricol Perdiguier 一八〇五～七五) は激しい非難の声をあげている。「かれら〔金持ち〕は、フランスのありとあらゆる金、富、資本を自分たちに引きつけている。これを進歩とみるべきだろうか。個人で仕事をする労働者をどこに見出すことになるのか。人びとはどうなるのか。

かれらの将来の運命はどうなるのか。」⁽¹²⁾

さて、このように金が君臨し経済原理が優先されていく歴史的経緯のなかで、産業資本家とならんで銀行家の役割がきわめて重要なものになっていくことに疑問の余地はあるまい。「吝嗇家」というレッテルのもとに個々の人格に張りついていた金は、個人を超えて銀行という巨大な組織、そしてその歯車のひとつである銀行家のもとへ吸引されていく。モリエールの『守銭奴』からバルザックの『ニュシンゲン銀行』やゾラの『金』への変化は、まさにそのような変遷の文学的反映であるといつてよい。と同時に、「金がすべて」という価値観の専制は、金に支配されるケチくさい小市民をも造形する。金持ちは「世界を銀行紙幣にして折りたたみ、財布のなかに入れて」⁽¹³⁾持ち歩くのである。いずれにしても、一九世紀前半から半ばにおける銀行家の急速な台頭は、ジャック・ラフィットが短期とはいえ政権の中枢に座つたことに象徴されよう。次稿で詳しく検討するように、ラフィットこそは純然たる地方出身者であると同時に下層階級の出であり、清貧の思想が遠ざけていた金を扱う金融界から頭角をあらわし、やがて社会の頂点を極めるといふ点で、もともと一九世紀的である。「ジャック・ラフィットの生涯は、それだけで一九世紀初期における力学のすべてを要約している」⁽¹⁴⁾というヴイルジニー・モニエの言葉はその意味で当を得ている。

一九世紀前半の職業意識

銀行家がきわめて一九世紀的な職業であつたことは理解できるが、この地位は一般の人びとからどのように見られていたのだろうか。

すでに触れたように、この世紀を特徴づけるのは、あらゆる意味において金が支配するようになったという事実である。この事態を如実に反映する文学作品はいくつもあるが、なかでもバルザックの『ユルシュール・ミルエ』(Ursule

Mirouët 一八四一)には、孤児ユルシユールの伴侶となる名門貴族の息子サヴィニヤン・ポルタンデュエールが金の威力をまざまざと認識する場面が描かれている。

この一週間のあいだ、サヴィニヤンはいまの時代についてさまざまな思考をめぐらしていた。何事においても競争であることは富をなそうとする者にはたいへんな労がもとめられる。非合法なやり口のほうが公明正大な探求よりも才能と地下工作が要るのだ。社交界での成功は、地位を与えてくれるどころか、時間を浪費させ、膨大な金を喰う。母がかれに全能だというポルタンデュエールという名前はパリでは何の役にも立たなかった。従兄の下院議員ポルタンデュエール伯は、上院や宮廷と対峙している下院の真つ只中でぱつとしなかったし、大した信用を勝ち得ているわけでもなかった。「中略」サヴィニヤンは、演説家や下位の社会環境から貴族にのぼってきた人びと、あるいは小貴族たちが影響力のある人物になっているのを見てきた。要するに、金こそがイギリスの社会を模してルイ一八世が創ろうとした社会の要 (*Pivot*) であり、唯一の方途 (*unique moyen*) であり、唯一の原動力 (*unique mobile*) なのである。¹⁵⁾

この小説は王政復古末期から七月王政初期にかけての時期を背景として、遺産相続者となる孤児から周囲にいる姻戚者たちが手を尽くして遺産を奪おうとする物語である。ここに示されるのは、社会環境がもはや家柄によって秩序づけられる時代ではなく、金の力によって価値の組み換えが起きていることを身に沁みて感じている人びとの姿だ。社会の基本的構造を決定するものが、継承される土地所有から金融投資へと変化したのである。

時代はブルジョワジーを核とする中間層の拡大という意識へ人びとを導いていった。たしかに金持ちと貧者の差は

あるにせよ、その両極のあいだにはひと続きの中間階層があつて、感知できないようなならかな傾斜によつて結びつけられているという意識である。言い換えれば、階層のあいだに絶縁や断絶はなく、直近の上層に行きつこうと思えばそれが可能なのであり、逆に努力を怠れば下層に落ちる危険も間近にある。互いの階層は、異なる階層に属する者を絶対的他者と感ずるほどに遠いものではなくなつていた。実際、一八三〇代あたりの記述には、そのような平等主義が浸透してきたことを窺わせるものが増えている。一八三七年、国民議会で公的奨学制度が議論された際、ソルボンヌの教授を務めるとともに教育行政にも深くかかわることになるサン＝マルク・ジラルダン (Saint-Marc Girardin 一八〇一～七三) は、議場でつぎのように発言して左翼系議員から喝采を浴びた。曰く、今日文明と知識を託された階級たるブルジョワジーがさもなくば国家予算をわがものにしてはならない、遅れた階級に手を差し伸べ、かれらを自分の階級に引き入れるべく心を広くして保護するのは進んだ階級の務めであり、名誉でもある¹⁶⁾。かれはさらに議論を進めて、そもそもそのような階級を分ける考えかたそのものが時代遅れで無意味だという。

もはやブルジョワジーもなければ階級もなく、顕著で越えられないような境界もない。ブルジョワジーが生き、永続するのは、もっぱら大地からブルジョワジーを出現させたその方法によるのであり、財産や栄光や知識においてその下に位置づけられている階級のなかに人間を求め続けることによるのである。そのような階級のなかにこそ、ブルジョワジーはエネルギーと力と豊穡さと未来を汲み取るのだ。そこにこそ自らの血があり、自らの生命の尽きぬ泉がある。今日、貴族階級が存在しないようにブルジョワジーもはやない。あるのは国民のみなのだ。

このように時代の変化を力説して、議会の議論を方向づけたのであった。

かつての階級が平準化して、しだいに大きな社会的中間層を形成していくという実感はかなり共有されていたように、バルザックにいわせれば、国家は「革命のお祭り騒ぎ」の結果たる「万人の平等を宣言して、物事のあらたな秩序」¹⁸を確立したのであり、それによって、パリでは「貴族議員も店員も、公証人も砂糖菓子屋も同じ燕尾服を着用し、同じ言葉をしゃべるようになった。ひとと家も、すべては均され」¹⁹たのである。ジュリアン・ソレルの夢を実現する社会は整いつつあった。スタンダールの未完小説『リュシアン・ルーヴェン』にも、「……」もとからの貴顕や貴族が落ちぶれるなかで、金だけが唯一の頼りであり続けているからで、何の心配もなく金があることこそが良きことのなかでもいちばんなのだ²⁰という台詞がある。

では、このような新しい意識のなかで、貴族的価値はことごとく放擲されたのだろうか。結論からいえば、もちろんそうではない。旧体制のような階級としての貴族は否定され、意識のうえでは中間層の拡大が進むなか、それは職業を介した階級意識へと大きく変化していったのである。市民の多くは、流動化した社会のなかでなお生き続ける旧貴族階級、金によって力をつけた新貴族階級、商業や工業にたずさわる者、職人、工場労働者などがより複雑に絡み合いながら、いっそう定義しがたいかたちで存在している格差を感じとっていた。それは生まれや土地所有といったわかりやすい指標による階層ではなく、どのような職につくかということに直接かかわっているような階級意識である。

親の職業を継ぐのが当たり前であった旧体制とはちがって、個人の努力と適正が新しい進路への道をひらき、親の世代とはまったく異なる人生を歩むことも可能になった時代にあつて、職業選択は格段に重要な問題になったことはいうまでもないだろう。

『マガザン・ピトレスク』(Magasin pittoresque) を発刊したことで知られるエドゥアール・シャルトン (Edouard Charton 一八〇七〜九〇) に『職業選択のためのガイドブック』(Guide pour le choix d'un état) という興味深い著作がある。一八四二年に出版され、のちに版が改められて『辞書』という副題がつけられるが、一九世紀末になっても版を重ねた。この書によれば、幸福になるための職業は以下の三つの条件を満たす必要があるとされる。第一に生活に必要なものを獲得させ、家庭を築くことを可能にし、儉約によって老後のための十分なゆとりをもつことが可能な職業であること、第二にその職業は個人の能力の行使を促し、精神の緊張を解くとともにその涵養に必要な余暇をもたらすものであること、第三に社会に有用であること、である。²¹⁾

ここで説かれているのは、経済的自立、能力の發揮、社会的有用性の三つと違ってよいだろう。第一はいうまでもなく職業選択の重要な要素として金があるということ、第二に、個人に求められる才能や能力が職業選択に深くかわりはじめたということ——これらはブルジョワ支配の重要な側面である。同時に見落としてならないのは第三の点で、社会にとって有用か否かという価値観である。冒頭でも述べたように、一九世紀はたしかに「成り上がり」の世紀であるが、ブルジョワジーの支配がそのまま金銭万能の世界を生んだかのようにみるのは短絡的であろう。「成り上がり」のなかにも「成り上がり」のままとどまる者と、そのようには見られなくなった者がいるのだ。アドリヌ・ドーマールがいうように、「テイエルは結婚以来、財産の確固たる地盤を築いたにもかかわらず、ずっと成り上りのままであり続け、(申し分のない人びと) から見下されていた」のに対し、ギゾーは「一八一四年には上流階級から軽蔑をもってみられていたのに、自身の能力によって万人に認められるようになつた」²²⁾。金がすべてであるかのような振舞いへと駆り立てる時代ではあったが、社会的有用性や信望がそのように振舞いを規制する部分も少なくなかつたのである。ジャン＝バティスト・セー (Jean-Baptiste Say 一七六七〜一八三二) が「ひとつの職業の魅

力と不快さのなかに、その職業に付随する尊敬と軽蔑を数え入れなければならない。希望はいくつかの職業にとつて利得の一部となる一種の給与である。⁽²³⁾と述べるように、市場経済に支えられた資本主義とブルジョワ支配の時代において、職業に直接結びついた新たな倫理と価値観が芽生え、旧来の貴族性とは異なる職業よる階層的秩序と価値がブルジョワジーの意識のなかに形成されてきたのだ。生まれの高貴さとは別の、しかしまた、金そのものとも違う次元での個人の徳性による希望が重要な要素となったのである。

ところで、このような状況のなか、いわゆる給与生活者の位置づけは芳しいものではなかった。一九世紀前半にはまだ中間管理職の概念が成立しておらず、「給料取り」(salary)のなかにはかなりの給与を得ている者も存在したが、この呼び方自体に「金」を匂わせる部分があるのにくわえて、「雇われ」という従属性があることによつて、全体として下位に置かれていた。あるいは自営に先立つ修行期間とみなされる傾向にあった。これに対して上位に位置していたのは、技師、企業や銀行、さらには保険会社の経営者である。これらの職種が評価されたのは、一定水準の教育が必要であり、教養と尊敬が相伴うものとしてしばしば自由業と混同されていたからでもある。なかでもっとも信用の置かれていた職業は、弁護士、銀行家、医師であつた。サン＝マルク・ジラルダンは一八三四年の時点で、「弁護士業、銀行業、医師業、これが信用される三つの職業で、たしかに社会の精神と慣習に影響を与えている。民衆はこれら三つの職業を追いかけている」と述べている。⁽²⁵⁾

いずれの職業も歴史的は古いが、職業倫理や希望と深く結びついていたのは弁護士と医師である。⁽²⁶⁾これに対して「金貸し業」である銀行家は、本来信用が基本となるはずだが、尊敬や希望といった観念からはずつと遠い存在であつた。一二世紀以降、十字軍遠征による国際交易の発達や為替手形の開発によつて飛躍的に発展するものの、文化的環境は総じてこの職業に敵対的で、こののちも長らくユダヤ人の職業として表象されることが多かつたことは繰り返すまで

もないだろう。土地所有を基礎とした経済のなかでは、「貨幣、資本および信用は、物々交換と《現物》支払いに対し副次的な役割しか果たさない時代が長く続いた」²⁷ためであり、何よりも教会が「金で金を生むこと」を固く禁じ、厳しくその罪を咎めていたからである。

繰り返しになるが、銀行家が目覚ましい社会的上昇を遂げたのは一九世である。かれらの地位や生活は、吝嗇や貪欲といった文化的メタファーを大きく超えて、文学の世界のなかで確固たる地位をしめるようになる。別の言い方をすれば、これは社会が資本主義的市場経済の原理を理解せずに説明できなくなったのと同様、同時代の人間模様を描くにあたっては銀行家の存在を無視しては著しくリアリティを欠くことになったことの証である。資本主義経済を基盤とした社会への大きな変化は、いうまでもなく産業革命によるのだが、一般に産業革命といえば生産と流通の効率を飛躍的に上昇させた製造、器械、技術などの側面だけが強調されがちだ。しかしながら、モーリス・レヴィール²⁸ポワイエらも指摘するように、社会の近代化過程において銀行制度が果たした役割は決定的であった。その結果、銀行や銀行家の存在は、たんに経済的因子にとどまるのではなく、社会的・文化的な視線のなかに取り込まれるようになったといってもよい。市民の見方がどうであれ、銀行家が少なくとも文学の中でその地位を大きく上昇させるのは、文学がリアリズムを標榜する時代にあつては当然のことといえる。

では、具体的に銀行家はどのようにあらわれるのであろうか。以下では、とくに一九世紀前半の小説空間のなかで銀行家の台頭とともに特権的な場となるパリの一地区に光をあててみよう。

銀行家たちの居住区

まだエツフェル塔もガルニエ宮もない一九世紀前半のパリを想起する場合、人びとはどの界限を起点に想像力をは

ばたかせるのだろうか。ノートルダム大聖堂のシテ島だろうか、それともヴォージュ広場のあるマレ地区だろうか。あるいはまた、サン＝ジェルマン・デ・プレ教会の周囲、カルチエ・ラタン、はたまたフォーブール・サン＝ジェルマン界限だろうか。

どんな都市でも地区ごとに異なる相貌をもつが、それは都市の歴史的發展によつて決定づけられることが圧倒的に多く、個々の地区の優位性は時代とともに移り変わる。パリについても同様で、歴史的起源は古いとはいへ、街区ごとに多様性を持ち、特徴と個性に彩られるようになるためには、パリが都市として一定の広がりをもたなければならぬ。今日、「パリ案内」の類の書では、二〇に分かたれた行政区を基本に、そこに位置する歴史的建造物等の文化資源や観光施設を重ねて紹介することが多いが、この行政区なるものが出現したのはフランス革命のさなか、一七九〇年のことにすぎない。²⁹ もちろん、中世以来、たとえば殷賑な商業活動に特徴づけられる街角や特定の職人が多く住む地域といった、ある種の佇まいは場所ごとに存在していたことは否定できない。しかし、個々の街区が特定のまとまりとして意識され、内からも外からもそのような括りで見られるようになったのは、おそらく都市の人口的拡大とそれにとりまなう近代的な都市構造の形成の結果である。どの国でも産業構造の変遷とともに首都へと押し寄せる人口の動態が変化し、城壁に囲まれていた中世都市の名残を消し去っていくわけだが、パリという都市も幾度にもわたつて城壁を建造しては破壊しながら拡張を繰り返し、そのたびに人口が大幅に増加するという歴史を繰り返してきた。この都市が今日のような象徴性を獲得し、神話的な輝きをはなつて世界に君臨するようになったのは、一八世紀末以降である。

ところで、一九世紀のパリの有閑階級を語るときにならざるもちだされる地区といへば、フォーブール・サン＝ジェルマン (Faubourg Saint-Germain) 界限マシヨセ・ダンタン (Chaussée d'Antin) 地区で、これにフォーブール・

サン＝トノレ (Faubourg Saint-Honoré) を加えれば、フランスを動かしていた上層階級のだいたいの勢力図を描きだすことができる。フォーブール・サン＝ジェルマンが王党派、とくに正統王朝派の貴族の住む界限として知られているのに対し、フォーブール・サン＝トノレは、貴族のなかでもリベラルで七月王政の政権に近い貴族階級、そして金融関係の大ブルジョワジーの住居が集まっていた。そして、銀行家、女優、新しい邸宅という、いかにもブルジョワジーの華やかな生活がもっとも似合うのはシヨセ＝ダンタンである。古典的な宮廷の豪華でもなく、貴族的な品位の漂う端正な優美でもない、金銭と華美な新しい装飾、そして肉感的な艶麗と妖美に彩られた、どこか成り上がり者の余臭をとどめる空気である。

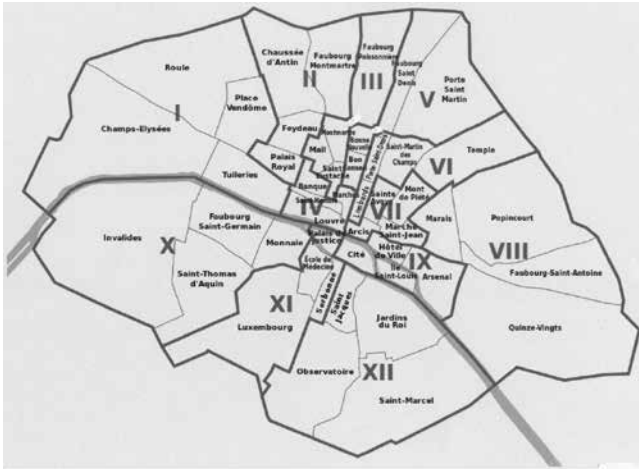


図1 12区のパリ (19世紀前半)

さきに触れたように、パリの行政区があらわれたのはフランス革命の時代だが、現在のように二〇区に分けられたのは第二帝政期の一八六〇年のことであり(一八五九年六月一六日の法令による)⁽²¹⁾、それ以前は革命期に決められた一二区制であった。⁽²²⁾一二の区の面積はまちまちで、右岸に一区から九区、左岸に一〇区から一二区が、概ね西から東へと並んでいた。フォーブール・サン＝トノレとシヨセ＝ダンタン地区は右岸の一区と二区に、フォーブール・サン＝ジェルマン地区は左岸の一〇区に位置する。一九世紀パリのブルジョワ社会を実証的に研究したアドリーヌ・ドーマールが、一、二、

一〇区、ついで一一区を「ゆどりのパリ」(Paris de l'aisance)とし、八、九、一二区を「貧困のパリ」(Paris de la pauvreté)と呼んで区別したことを想起すればよい。⁽³²⁾たとえば納税有権者 (censitaire) の人口をみてもそれはあきらかだろう。知られているように、フランスでは革命期に第三身分から三部会 (Etats généraux) へ送り出す代表を納税選挙によって選出したが、この制度はその後も引き継がれた。王政復古期 (一八一五～三〇) に選挙権を得るには納税額が三〇〇フラン以上でなければならず、七月王政にはいって減額されたものの (一八三二年四月以降)、やはり二〇〇フラン以上の納税者に限られていた。⁽³³⁾彼女の研究が示しているように、⁽³⁴⁾一八四二年における人口千人当たりの有権者の割合は二区がいちばん多く、つづいて三区、四区が三〇人を超えている。さらに、一区と右岸の一〇区、一一区が二〇名を超えている。一定以上の税額を納める者、すなわち相対的に富裕な者がパリの西側半分に集中していたことが、これをもてわかるだろう。ちなみに一二区の数値は際立って低い。『ゴリオ爺さん』でヴォートランやラストイニヤックが生活していたヴォーケール館は、まさに一二区にあった。

一八世紀以降、裕福な金融業者が住居をもとめたのは、さきにも述べた右岸のフォーブール・サン・トノレを含む旧一区であり、その後、一八世紀末から二区のシヨセ・ダンタンを中心とする地域に集中するようになり、この地名は銀行家や金融資本家の地理的象徴となっていく。以下、シヨセ・ダンタン地区に焦点を絞りながら、銀行家とパリの地理的關係を描いてみよう。

ギマール邸

両大戦のあいだに、一九世紀のパリ、とくにグラン・ブールヴァール周辺の賑わいを活写したジュール・ベルトール (Jules Bertaut 一八八七～一九五九) も一九世紀初めのころのシヨセ・ダンタン通りについて以下のように書いてい

る。

「……」金融家、銀行家はだれ彼なしに供応し、絶えず客をもてなしていた。もちろん、宝石で身を飾らせ、モン・ブラン通り(今日のショセーダントン通り)のほうにそびえる新しい家々に豪華に住まわせている愛人を、みな見せびらかすのだ。この界限は高級な色事⁽³⁵⁾の中心地になっていて、今日なら「高等娼婦」(demi-castors)と呼ばれるであろう女性たちが住んでいた。

ナポレオンによって大革命の混乱がかたちのうえで終息したとはいえ、革命のあとに残された人びとの心はいえ、自分の居場所をみつけれない、平衡を失ったような感覚のなかにあった。たまさか大胆さと運でつかんだ地位をわが物とし、不安定な「いま」を目いっぱい生きる―戦争の合間にもどってきた軍人たちはパリにそのような空気をもち込んだ。七面倒くさい礼儀や作法や形式は省略して目の前の実⁽³⁶⁾をとる。明日の幸せではなく今日の快樂に身をゆだねるのだ。第一帝政ほど腐敗していた時代はない、といわれるのは、革命とそれに続く戦争のなかで、急に成り上がった金満家やかれらに囲われる娼婦、財産を失った亡命貴族や臆面もなく振る舞う軍人たちが互いに入り乱れ、享樂の利那を生きていたからである。そのなかでもっともはっきりとした基盤をもっているのは銀行家であった。以後、銀行家と娼婦の關係は、この界限を中心に一九世紀文学を通じて繰り返し描かれることになる。

ところで、グラン・ブールヴァールの外に位置するこの地区は、一八世紀に大きく変貌を遂げる。当時の地図をみればあきらかだが、世紀後半に目を瞠目するような勢いで都市化が進み、あたらしい道がつくられ、つきつきと邸宅が建てられた。もともとこの地区の大部分は、三位一体修道会(マトウリヌス修道会)が所有していた菜園であった

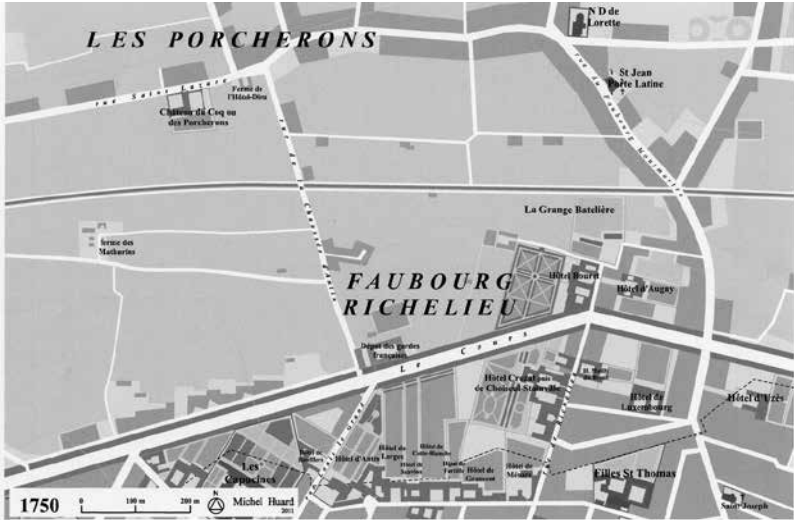


図2 1750年のショセ＝ダントン

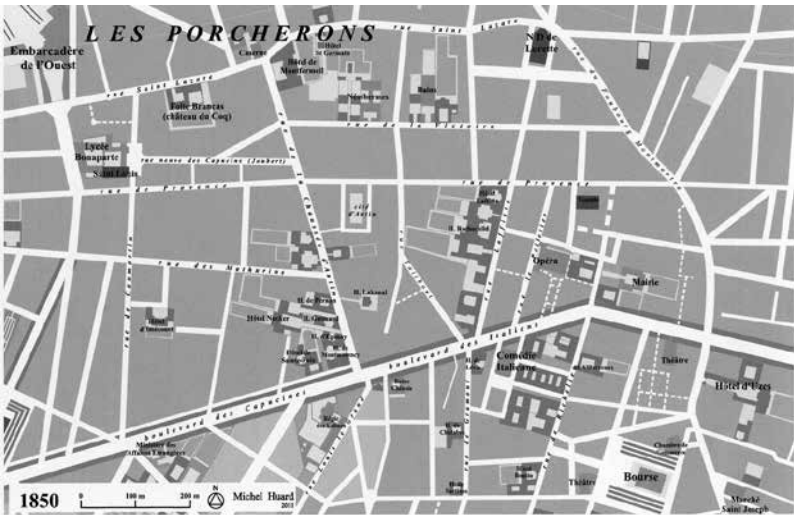


図3 1850年のショセ＝ダントン

が、一八世紀半ばごろから大々的に不動産投資の対象となり、多くの私邸が新古典主義建築の筆頭であるニコラ・ルドゥー (Claude-Nicolas Ledoux 一七三六～一八〇六) をはじめ、パリの証券取引所を設計したアレクサンドル・ブロニヤール (Alexandre-Theodore Brongniart 一七三九～一八一三)、プローニュの森に建つシャトー・ド・バガテルで有名なフランソワ・ベランジュ (Francois-Joseph Bélanger 一七四四～一八一八)、オデオン座の設計者のひとりであるシャルル・ド・ヴァイイ (Charles de Wailly 一七三〇～一九八) といった名だたる建築家によって建設されることになった。

アンシャンレジュム
旧体制の崩壊までレ・ポルシユロン (Les Porcherons) と呼ばれていたこの地域は、一八世紀半ばまではほとんど何もない農地で、名称もレ・ポルシユロンという一家が所有していたことに由来する。⁽³⁷⁾ 東西でいえば、今日のサン＝ラザール駅の東側からフォーブール・モンマルトル通りあたりまで、南北でいえば、ちょうどオペラ座(ガルニエ宮)の背後、プロヴァンス通りより北側で、トリニテ教会とノートルダム・ド・ロレット教会を結ぶ線の南側に位置する一帯である。一四世紀初めには、一家は当時のポルシユロン通り(ほぼ現在のサン＝ラザール通りにあたる)に面して城館を建設していた(一三二〇年)が、一八世紀の半ばになっても「広大な野菜畑しかみえず、遠く距離において田園風の建物と宗教的建造物がまばらにあった」⁽³⁸⁾ にすぎない。それが世紀後半になって急速に発展し始めるのである。一八世紀末から王政復古にかけて、これらの土地や建築物を取得したのは新たに富を得たものたち、多くは金融関係者、売れっ子の女優、オペラ座の踊り子であった。

さて、この地区のそのような特性を象徴的に示す建造物がある。ギマール館とよばれていた邸宅で、ニコラ・ルドゥーの手によるものである。その名のとおり、一八世紀後半を代表するオペラ座の踊り子、マリー＝マドレーヌ・ギマール嬢 (Marie-Madeleine Guimard 一七四三～一八一六) のために一七七〇年から七三年にかけて建築された。



図4 ギマール邸

場所はシヨセーダンタン通りにあり、「テルプシコラの神殿」(Temple de Psychichore)とも呼ばれ(ちなみにテルプシコラとはギリシヤ語で「舞踊の楽しみ」を意味し、ミューズのひとりで踊りの女神)、当時パリでもっとも有名な建物のひとつであった。画家フラゴナール(Jean-Honoré Fragonard 一七三二―一八〇六)が裝飾し、庭にはヴィーナスに捧げられた神殿が設えられていた。館の正面円柱(ペリスタイル)にはアポロンがテルプシコラに冠を授ける彫刻があり、建物の名もこれに由来する。踊り子ギマール嬢をテルプシコラに擬しての意匠であることはいうまでもない。

ギマール嬢といえは、踊りの才能のみならず奔放かつ放蕩な生活でも知られ、多くの男性が彼女と関係をもった。そのなかには、革命を率いることになる著名な政治家ミラボー伯(Comte de Mirabeau 一七四九―九二)、オルレアン公(Louis-Philippe d'Orléans 一七四七―九三)、ロココ芸術を代表する画家のフラゴナールなどもある。このフラゴナールに館の裝飾を命じたのが彼女のパトロンのひとり、スービーズ公、すなわちシャルル・ド・ロアン(Charles de Rohan, prince de Soubise 一七一五―八七)で、当時、遊蕩と道楽でつとに知られていた人物である。一時は閣僚をつとめるなど、君寵を欲しいままにしたが、娘婿の破産によって、政権中枢から身を引かざるを得なくなり、ギマール嬢との関係も終止符が打たれた。その結果、彼女は経済的困窮に陥り、ついにはこの館を手放す決意にいたるのである。

ギマール嬢についてはエドモン・ゴンクールが評伝を残していて、この館についてもかなり詳しく語られているが、それによれば「テルプシコラの神殿」の開館は一大イベントであった。というのも、この館の二階には五〇〇名収容できる劇場が備えられていて、一七七二年二月の初旬と予告された開館の日には、そこで『アンリ四世の狩り遊び』(La Partie de chasse de Henri IV)と『酒に真実あり』(La Vérité dans le vin)⁽⁴⁰⁾が上演されることになっていたからである。その券をもとめて大騒ぎになったのだ。⁽⁴¹⁾結局、一月八日の開館の日には、錚々たる面々が集まり、オルレアン公(Philippe d'Orléans)、ラ・マルシュ伯(コンテイ公)⁽⁴²⁾らの顔もあった。女性も当時のパリの第一級の美女たちが集ったという。⁽⁴³⁾

さて、スービーズ公が経済的困窮に陥り、ギマール嬢を捨てたことはすでに述べたとおりだが、このとき、すでに彼女も齢四〇を超えており、この年齢で後ろ盾をなくした踊り子にとつてとるべき道は邸宅を売りに出すことしかなかった。おもしろいことに、彼女がとつたのは「籤」による競売という方式で、籤を二五〇〇本発行し(一本あたり一二〇フラン)、合計額が三〇万フランとなるようにして、それを販売したのである。たつた一本の籤でこれを引き当てたのはロー伯爵夫人(comtesse de Lau)という女性であったが、館はすぐにジュネーヴ出身の銀行家ジャン・フレデリック・ペレゴ(Jean Frédéric Perregaux 一七四四―一八〇八)に転売された。ペレゴのもとで修業をし、一九世紀の大銀行家ジャック・ラフィットはまさにこの建物からスタートを切るのであって、その意味でも象徴的な館といえよう。

ペレゴについては、次稿で詳しく述べるとして、この邸宅の周辺には、まさに金融界の巨頭たちがつきつきに自宅を築造した。すぐ隣の邸宅は当時財務長官でありスタール夫人の父でもあるジャック・ネッケル(Jacques Necker 一七三二―一八〇四)が建てたもの。かれもまた、もともとジュネーヴ出身の銀行家であったことを忘れてはならな

い。若くしてパリに出るや頭角をあらわし、テリユソン＝ヴェルネ銀行に入り、そのち共同経営者となって、七年戦争の終結とともに莫大な財産を築いていたのである。⁽⁴⁴⁾新興住宅地シヨセ＝ダンタン地区はこのように、スイス出身の銀行家たちが多く住んでおり、パリのなかでもスイス系プロテスタント精神の漲るトポスを形成していたといえるかもしれない。

文学空間を拓く銀行家たち

シヨセ＝ダンタン通りのあたりは、このように金融界の大物たちが邸宅を建てる地区に変貌していった。一九世紀前半、王政復古期から本格的に開発されてくるこの界隈は当然、バルザックの『人間喜劇』の世界においても重要なトポスとなっている。銀行家を中心とする新しい資産家、経済の主役が土地から金に変わり、信用と投機を手玉にとつてかたちのない株式や為替の操作で巨万の富を積み上げる金融家のまわりに吸い寄せられる人物たち——そのような人間模様を描く小説世界には欠かせぬ存在である娼婦や女優たちもまた、この地域を足場にするようになるのである。

『人間喜劇』で有名な銀行家といえはニユシゲン男爵であろう。王政復古の一八二〇年代、男爵の館が建っていたのはサン＝ラザール通り (rue Sait-Lazare) である。『ゴリオ爺さん』にこの街並みの簡単な記述がある。

ラストイニヤックはサン＝ラザール通りに着いた。そこは、パリの綺麗さをなしている細い円柱と狭い柱廊のあるあの軽妙な家々のひとつ、スタッコや大理石のモザイクを敷かれた階段の踊り場など高価な意匠をふんだんに取り入れた、まさしく銀行家の家であった。⁽⁴⁵⁾

この街区に並んでいたのは、プレイヤッド版の注釈者も記しているとおり、「パツラーデイオ様式をフランスに適用した建築家たちによって一八世紀の末に建てられた瀟洒な家々」⁴⁶である。ここでバルザックがこの家を「まさしく銀行家の家」(une véritable maison de banquier)と書いているところに留意しなければならない。すでにみたギマール嬢邸と同種のこうした様式は、一八二〇年前後の人びとの眼には銀行家が住む典型的でモダンなものだったのである。

『ゴリオ爺さん』でゴリオの娘と結婚した銀行家ニュシンゲン男爵だが、『娼婦の栄光と悲惨』では娼婦エステル・ゴプセックに恋の炎を燃やすことになる。ところで、エステルが住んでいたのもやはり旧二区、サン＝ジョルジュ通りだ。この街区は、ノートル＝ダム・ド・ロレット通りとともに、王政復古期に造成されたところである。

しかしながら、エステルは最初からサン＝ジョルジュ通りに住んでいたわけではない。『娼婦の栄光と悲惨』の「娼婦たちはどのように恋をするか」と題された第一部冒頭、オペラ座の舞踏会に仮面をつけてリュシアン・ド・リュバンプレに連れられてあらわれたエステルであったが、「しびれえい」(La Torpille)の異名をとる娼婦であることが見破られ、傷心のうちに自宅に戻って自殺を図ろうとする。このとき、彼女の自宅があったのはラングラード通り(Rue de Langlade)である。この通りはパレ・ロワイヤルの西側、リシユリユー通りとサン＝トノレ通りとヌーヴ＝デ＝ブテイ＝シャン通り(現在のブテイ＝シャン通り)に囲まれた部分にあり、これら華やかな通りの雰囲気と対照をなす陰鬱な一角であった。その後、オペラ通りの開削によって消失した。

これらの狭く暗い泥だらけの小路では、外観にほとんど意を払わない生業(Industries)が営まれているが、夜になると謎めいた、大いに対照をなすような様相を呈するのであった。産業(Industrie)やモード(Mode)

や芸術工芸 (Arts) のさまざまな傑作が光を放ち、群集がひきも切らずひしめくサン・トノレやヌーヴ・デ・ブテイ・シヤンやリシユリユーといった通りの、光に満ちた場所から戻ってくると、宵のパリを知らない人間なら、空にまで反射しているあの微光を取り巻く迷路のような小路のなかに落ちて、陰鬱な恐怖のようなものとられえらるるにちがいない⁽⁴⁷⁾

ここでバルザックは「industrie」という語を二度使っている。一方は複数形で語頭は小文字であるのに対し、他方は、「続く」「モード」と「芸術工芸」の語とともに単数かつ大文字で始められている。前者が古い時代から続く小規模の稼業であろうことは容易に想像がつく。後者は一九世紀がうみだした近代の「産業」であろう。王政復古の時代から最新流行を売る店が街に彩りを添えはじめることは繰り返すまでもない。ここで販売される商品は、最新の工芸技術と流行と産業が合体してこそ得られる「傑作」であり、新旧をもつとも対照的に映し出す品であった。小説の作者はおそらくこれらをこの世紀の象徴として大文字で並べ、それらが照らす輝きと華やかさに満ちた街区のあいだに忘れ去られたように佇む小路で営まれる旧態の稼業を小文字で示したのだろう。賑やかな街の「ガス灯の奔流」もこうした迷路までは届かず、人通りはまれだ。「店は閉まっけて、開いているとすれば怪しげなところで、汚らしく、灯もろくについていないキャバレとか、オー・デ・コロシムも売っている下着屋などである。[…:]うらぶれたな街角がいくつもあるが、なかでも際立っているのがラングラード通りとサン・ギヨームの抜け道を出たところ、そしていくつかの曲がり角だった。」さらに、この一角は「巨大なハンセン病隔離病院」(Grande léproserie) に擬せられ、売春の「本拠」(quartier général) でもあり、市当局もほとんど野放しにしていたのであった⁽⁴⁸⁾。

物語冒頭で描かれる「しびれえい」の住所のあったこの界限は、のちに彼女が住むことになる新興住宅地と明瞭な

対照をみせる。まず、謎のスペイン人の僧、カルロス・エレラ（ヴォートラン）がエステルに準備したのはテーブル（*Table*）の住居であった。⁽³⁰⁾ ショセダンタン通りの東側に南北に延びるテーブル通りは、一九世紀、裕福な金融業者たちが高級娼婦を住まわせる場所のひとつであり、彼女はここでリュシアンと秘かに会うことになる。さらに物語は進み、ニュシンゲン男爵の公然たる愛人になるときは、この銀行家がサン・ジヨルジュ通りに彼女のために用意した「小さな館」に移り住むことになる。⁽³¹⁾ ニュシンゲンは四〇日かけて買収した館の手入れをしたのであった。かれは「すべてがニュシンゲンの財産と釣り合いがとれているか」、「鳥かごを鳥にふさわしいものにするよう託された工芸家たちによって」この館がそのように実現されているかを確かめさせる。

一八三〇年の七月革命以前の贅沢と名のつくありとあらゆる創意の品々が、この家をよき趣味の見本にしていた。建築家グランドーはそこにみずからの装飾家としての才能の傑作をみていた。大理石で造りなおされた階段、スタッコ、布生地、暗めに塗られた金泥、はつきりと印象を与えるものと同様にごく些細な部分でさえも、パリになお残るルイ一五世時代の同種のものどれよりもすぐれていた。⁽³²⁾

ここで装飾を担当したグランドーという人物は、『人間喜劇』のなかで何度か登場する架空の建築家で、一八二〇年代以降、人気を誇っていた。ローマ賞を得てイタリア留学を終えたあと、すでにサン・トノレ通りの香水商セザール・ピロトーのアパルトマンを改築していた⁽³³⁾、このあとも『従妹ベット』でセレスタン・クルヴェルからアパルトマンの装飾をまかせられることになるだろう。⁽³⁴⁾

いずれにしても、エステルが引き寄せられていった場所は、商業活動や金融操作によって急速に蓄財した成金の住

居の並ぶ街区であった。一七四〇年ごろに生まれ、この時期には最晩年に達していたゴブセックが、やはり近い世代のゴリオ（一七五〇年ごろの生まれ）住んでいたカルティエ・ラタン界隈にずっととどまるのと対照的に、一七六〇年代以降に生を受けた銀行家たちはこの新しい地区を拠点に富と贅沢を見せつけるような生活をするのである。

バルザックは、現実の金融家を地理的にもリアルに小説空間のなかに住ませ、パリの日常生活に欠かせぬ存在となった銀行家とその周囲に鋭いまなざしを向けたのである。（続く）

註

- (1) Maurice Lévy-Leboyer, *Les banques européennes et l'industrialisation internationale dans la première moitié du XIXe siècle*, PUF, 1964, p.15.
- (2) Marie-Hélène Huet, *Le héros et son double. Essai sur le roman d'ascension sociale au milieu du XVIIIe siècle*, José Corti, 1975, pp.163-171. 一八世紀において身分が上昇するのには数代かかり、一代で成り上がるのは極めて難しかった。このことは、ユエも参照しているアトリーヌ・ドーマールとフランソワ・フェレの研究があらかにはいてるとおりである。Cf. Adeline Daumard, François Furet, *Structures et Relations sociales à Paris au dix-huitième siècle*, Cahiers des Annales, n. 18, A. Colin, 1961.
- (3) 植田祐次編『十八世紀フランス文学を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇三年、四五頁。
- (4) これらの言葉が社会的意味をつよくまとうようになったのは一九世紀からである。《nouveau riche》を例にとつていえば、一八世紀にはたんに「最近金持ちになり、その富をこれ見よがしに、趣味悪く見せびらかす人」のことをいっていたのが、一九世紀になると、「低い身分の出で、既成の資産家とブルジョワジー一般から警戒と軽蔑をもってみられる金持ち」という意味でもちいられるようになった。Cf. Alain Rey (sous: la dir. de), *Dictionnaire culturel en langue française*, Le Robert, 2005, 4 vols, entrées «riche», «Parvenu».
- (5) アダム・スミス『国富論Ⅰ』（大河内一男訳）、中公文庫、一九七八年、五二～五四頁。
- (6) カール・ポランニー『経済の文明史』（玉野井芳郎、平野健一郎編訳）、ちくま学芸文庫、二〇〇三年、三五頁。

- (7) 同右。
- (8) 同書、三六頁。
- (9) ジャック・ルロワ『中世と貨幣 歴史人類学的考察』（井上櫻子訳）、藤原書店、二〇一五年、二五三頁。
- (10) ショルジョ・アガンベン『いと高き貧しさ 修道院規則と生の形式』（上村忠男、太田綾子訳）、みすず書房、二〇二三年、一六三―一九三頁。アガンベンがこのような生の形式のなかに大量消費社会の超克を模索する糸口を見出そうとしているとすれば、近代の資本主義社会は、清貧の思想を遠景へと押しやりつつ発展してきたものといえるだろう。
- (11) 一般にはギゾーの言葉として人口に膾炙している。
- (12) Agricol Perdiguer, *Mémoires d'un compagnon*, Éditions Duchamp, 1854-1855, «Le tour de France», p.301. ベルディギエにこのときは、喜安朗『近代フランス民衆の「個と共同性」』紀伊國屋書店、一九九四年、第一章「近代民衆の〈個と共同性〉―アグリコル・ベルディギエ『職人組合の書』をめぐる問題』を参照。
- (13) Théophile Gautier, *L'Orient*, G. Charpentier, 1882, t. I, p.300.
- (14) Virginie Monnier, *Jacques Laffitte. Roi des banquiers et banquier des rois*, P.I.F., Peter Lang, 2013, p.15.
- (15) Honoré de Balzac, *Ursule Mirouët*, in *La Comédie humaine* III, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1976, pp.876-877.
- (16) *Journal des débats*, 28 mars 1837.
- (17) *Journal des Débats*, 28 mars 1837.
- (18) Honoré de Balzac, *Béatrix*, in *La Comédie humaine* II, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1976, p.585.
- (19) Frédéric Soulié, *Paris ou le livre des cent et un*, Paris, 1831-1834, t. VIII, p.2.
- (20) Stendhal, *Lucien Leuwen*, in *Œuvres romanesques complètes* II, édition établie par Yves Ansel, Philippe Berthier et Xavier Bourdenet, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2007, p.447.
- (21) Édouard Chartron, *Guide pour le choix d'un état*, Paris, F. Chamerot, 1851 (2e éd.), p.VII.
- (22) Adeline Daumard, «L'argent et le rang dans la société française du XIXe siècle», in *Romantisme*, n° 40, 1983, p.29.

- (23) Jean-Baptiste Say, *Cours complet d'économie politique pratique*, t. II, Paris, 1830, p.73.
- (24) Adeline Daumard, *La bourgeoisie parisienne de 1815 à 1848*, Albin Michel, 1996, p.26.
- (25) Saint-Marc Girardin, «De la profession d'homme de lettres», in *Essais de littérature et de moral*, t. II, Charpentier, 1845, p.169. 上の記事は最初『*Journal des Débats* (28 octobre 1834)』に発表されたものでもある。
- (26) 医師についてはヒポクラテスにはじまる長い伝統があるし、弁護の法的基盤についてもユスティニアヌス帝の時代に整備されてい²⁹。
- (27) エドウィン・グリーン(石川通達監訳)『図説 銀行の歴史』、原書房、一九九四年、七頁。
- (28) Fernand Braudel, Ernest Labrousse (dir.), *Histoire économique et sociale de la France*, PUF, «Quadrige», t. III, 1993, p.347.
- (29) 一七九〇年六月二十七日の法³⁰は四八の街区 (sections révolutionnaires) に分けられた。これはのちに「quartiers」という名称に変わる。また、その上位区分である「区」(arrondissements) があらわれるのは一七九五年からである。
- (30) 共和暦四年葡萄月一九日(一七九五年一〇月一日)法による。
- (31) 一二区のそれぞれはいずれも四つの地区に分かれていた。これは一七九〇年六月に定められた四八地区制度の名残である。
- (32) Adeline Daumard, *La bourgeoisie parisienne de 1815 à 1848*, op. cit. pp.184-200.
- (33) 被選挙権については、王政復古期には一〇〇〇フラン以上、七月王政期には五〇〇フラン以上の納税者が対象となった。一八四八年の第二共和政とともにこの制度は廃止され、普通選挙(ただし男性のみ)にとって代わられる。
- (34) Adeline Daumard, *La bourgeoisie parisienne de 1815 à 1848*, pp.191-192.
- (35) Jules Bertaut, *Les Belles Nuits de Paris*, Flammarion, 1927. Cité par Gilles Durieux dans *Le roman de Paris à travers les siècles et la littérature*, Albin Michel, 2000, p.272
- (36) *Ibid.*, p.271.
- (37) Alfred Fierro, *Histoire et mémoire du nom des rues de Paris*, Parigiamme, 1999, p.104.
- (38) Edmond Goncourt, *La Guimard: d'après les registres des menu-plaisirs de la Bibliothèque de l'Opéra, etc., etc.*, p.1893, p.87.
- (39) もちろん一八世紀の一大スキャンダル、「首飾り事件」に連座したロアン板機卿 (Louis-René-Édouard, prince de Rohan 一七三四〜一八〇三)の従兄にあたることから、これを契機に国王の崩壊を失うことになる。

(40) 両作品ともシャルル・ロン(Charles Colle 一七〇九―一八三三)の喜劇(三幕)で、『社会劇』(*Théâtre de société*)と題されたコレの喜劇集成(二巻、一七六八年)に含まれる。前者の初演は一七六四年(出版は六六年)。第一幕でシユリに対する宮廷での陰謀の結末が語られ、二幕、三幕では狩りの途中、雨にたたられて立ち寄った農民の家でアンリ四世が民衆の素朴な生活を観察したり、大貴族にさらわれた娘を助けたりする内容だが、ルイ一五世は、この芝居を観ながらも、そこに民衆に立脚する王制の讚美と、現体制に対する批判の種を撒く危険性を嗅ぎとって、コメデイ・フランセーズでの上演はけつして許可しなかった。国王の死後、コメデイ・フランセーズでも上演されるようになり、革命期をとおして『フィガロの結婚』と並んでもっとも人気を博すことになる。一方、『酒に真実あり』は一七四七年の作品で、度を過ぎない陽気さが讃えられており、集成的な傑作といえるが、この開館に際してバリ大司教との悶着があり、『酒に真実あり』に代えて『ビッグマリオン』というパントマイムを上演するに落ち着いた。

(41) Edmond Goncourt, *op. cit.*, p. 87 et suiv.

(42) ルイ＝フランソワ・ド・ブルボン＝コンテイ(Louis-François de Bourbon-Conti 一七一七―一七三六)。ルイ一五世と対立し、多くの哲学者や著述家の後ろ盾となった。ルソーを庇護し、ボーマルシェに年金を与え、モーツァルトを迎えたことでも有名である。一七六〇年にヴォーヌ＝ロマネにブドウ畑を買い、「ロマネ＝コンテイ」の名の由来ともなった。

(43) Edmond Goncourt, *op. cit.*, p. 99.

(44) 七年戦争の終結を見越して、かれらは国債のみならず、東インド会社の株券や麦市場にも投資し、短期のうちに富を築くことができた。

(45) Honoré de Balzac, *Le Père Goriot*, in *La Comédie humaine* III, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1976, p. 168.

(46) *Ibid.*, p. 1282, note 2. この註には、こうした様式の建築家なかでもっとも有名なのがクロード＝ニコラ・ルドゥーであること。そしてかれがシヨセ＝ダンタンのギマール嬢邸とフォーブル・ポワニエールのタバリ邸(Maison Tabary)を設計したことにも言及されている。

(47) Honoré de Balzac, *Splendeurs et misères des courtisanes*, in *La Comédie humaine* IV, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1977, p. 446.

- (48) *Ibid.*, p.446.
- (49) *Ibid.*, p.447.
- (50) *Ibid.*, p.480. バルザックは最初、原稿段階ではエルデル通り (rue du Heider) を考えていたようだが、第一校正の段階でテブー通りに書き換えられた (*Ibid.*, p.1350, *Notes et variantes* de la p.480, variante b.)。エルデル通りは一七七五年に造られ、ブールヴァール・デ・シタリアン (Bd. des Italiens) から北に延び、テブー通りにおつかる (今日、この地点にはオスマン大通りが貫通している)。したがってこのエルデル通りは、シヨセ・タンタン通りの右隣に位置しており、一九世紀前半には新興成り金たちがこぞって居を構えた場所のひとつであった。レストー伯と結婚したゴリオの娘アナスタジーが住んでいたのもこの通り (*Le Père Goriot*, *op. cit.*, p.279)。なお、一九世紀前半に人気を集め、時代の先端をいく裕福な上流社会の人間であればその顧客であることが必須であったカフェ・トルトーニ (Tortoni) もテブー通りとブールヴァール・デ・シタリアンの交差する地点にあった (Cf. Anne Martin-Fugier, *La Vie élégante ou la formation du Tout-Paris* (1815-848), Editions du Seuil, 1993, p.328)。
- (51) *Splendeurs et misères des courtisanes*, p.399. 彼女(們)に住み始めるのは一八二九年の年末である。
- (52) *Ibid.*, pp.599-600.
- (53) Honoré de Balzac, *César Biotteau*, in *La Comédie humaine* VI, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, coll. *Bibliothèque de la Pléiade*, 1977, pp.98-99.
- (54) Honoré de Balzac, *La Cousine Bette*, in *La Comédie humaine* VII, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, coll. *Bibliothèque de la Pléiade*, 1976, pp.155-156.

(本文中に挿入した地図は、ATLAS HISTORIQUE DE PARIS (<http://paris-atlas-historique.fr/>) にあるものを借用している)。